

未黒野 平成二十四年十二月五日発行 第六十七卷第十二号(通巻七九六号)

# 未黒野

すぐろの

12月号  
(通巻796号)

月  
の  
道

小川玉泉

白じろと朴の葉裏や秋の風  
自づから手を合はせをり盆の月  
鯰跳べり夕日を返す白き腹  
半歩づつ杖先定め月の道

書を閉ぢてこほろぎの声較べをり  
早稲刈られ阿夫利嶺の空深まりぬ  
土踏むは三月振りなり椎拾ふ  
更くる夜を不意に脚下の鉦叩  
煙出さず腸なき秋刀魚焼き上げぬ  
竜淵に潜み岩屋へしぶく波  
雨の日の桃色止まり酔芙蓉  
爽籟を生む松林の売地なる

# 迢空忌

松本三千夫

押し移る雲の厚さや棚田稲架  
一幹の揺れにざはめく竹の春  
草の丈尺と離れず秋の蝶  
葛咲ける城址への道迢空忌  
函嶺の湯に四肢伸ばす星月夜  
島なかの海女の抜け道きせる草  
秋茄子島の畑は篠ささ蔭かげに  
流星や灯台ひかりもて応へ  
どつしりと地に尻据ゑて種茄子  
取り落とすペンの転がる夜長かな  
書類出す鞆の底や捨扇  
森渡る風の行方や秋澄める

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 津軽富士

黒滝志麻子

山国の闇の下り来し蚊遣香  
膝小僧もてあましたる残暑かな  
新涼の文鎮を置く夜の静寂  
爽涼の池に片寄る水の皺  
どこまでも続く稲田や津軽富士  
満天の星降る牧場虫すだく  
爽やかや馬のたてがみ煽る風  
風を切る馬上の少女秋夕焼  
水の無き川巾狭し葛の花  
小鳥来る山の麓の滑り台

## 波郷のこゑ

田中臥石

百舌猛る玻璃戸透かしの松林  
秋の虹消えをり沖の蟹気楼  
文机の切子の皿に黒葡萄  
耳底に波郷のこゑや鵲猛る  
鯨叩く音軽やかや夕厨  
存念の一誌ありけり曼珠沙華  
晩稲田や海へ真直ぐに刈り進む  
棒稲架の匂ふ里山棚田道  
秋の日の街空走るモノレール  
酒注ぐ秋の彼岸の墓へかな



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

## 三尺寝

岡野里子

さんま焼く

小倉正穂

棟梁に間を置き弟子の三尺寝  
草叢に紅一点やてんと虫  
ざんざ降りの雨の生む風秋立てり  
子規庵や門とに鉢植糸の鶏頭花  
ぬばたまの夜空に著き翳雲  
おわら節風に乗り来ぬ豊の穂田  
二輪車の盆僧袖をひるがへし

持ち帰りたき夕風や月見草  
風鈴の音色にけふの身をほぐす  
切り出せぬ一と言扇子閉ぢひらき  
立秋を疾うに過ぎみて寝苦しき  
初さんま焼く幸せに尺度なく  
敬老日過ぎ朝夕の常となる  
忽然と湧くかに畦の彼岸花



吾亦紅

加藤静江

夏果つる

菅野蒔子

秋暑し近道と謂ふ回り道  
行合ひの空の深さや吾亦紅  
久に合ふ友等明るし青ふくべ  
サッカーの子等の喚声赤とんぼ  
雲映す池広びろと秋気澄む  
秋蟬の声一山にひびき合ひ  
小康の夫看る幸や竹の春

赤とんぼ

菅野日出子

猛暑日の記録更新目前に  
砂浴びし鳥のくぼみや早畑  
雲の隙耀ひ炎帝出を待てる  
炎昼や隣家を壊す工事音  
己の座いつもの位置に夏果つる  
伝言の納得いかず秋の暮  
九月来や師の忌身内の忌を迎ふ

蕎麦の花

城戸

緑

容赦なき老いへの予感雁来紅  
物忘れ恐るる日々や秋ともし  
秋麗やかくまで碧き柿田川  
我が丈を越えし草の秀赤とんぼ  
秋澄むや葉裏に残る昨夜の雨  
今年また道を狭めて夕化粧  
蝸や一輪車の子ちりぢりに

乳牛の親子草食む花野かな  
花野描く色鉛筆の十二色  
瀬の音に明くる安曇野蕎麦の花  
風吹けば松虫草に吾が染まり  
奥社まで続く階つくつくし  
花芒撥ねあげてゆく小海線  
新涼や傘寿と言へど夢を持ち

# 青炎集

横浜 嵐 弥生

黒揚羽案内のごとく墓裏へ  
麦飯を噛みて昭和を沸々と  
閉ざされし炭窯包む蟬時雨  
二百十日事なく過ぎて月明り  
行合の蟬の競ひや森の道  
秋風や潮の香ふつと浜通り

横浜 土田 亮

薄紅の葉生姜の東道の駅  
敗戦日宮城前に実きしこと  
あと幾度叶ふや老いの盆帰省  
碇泊灯ひしめく盆の船溜り  
改築の隣家の足場鰯雲  
水洩るるホースの継ぎ目秋暑し

# 小川玉泉選

横浜 太田良一

セメントを捏ねる飯場や雲の峰  
みんなを集めて山の暮れにけり  
体内に世界地図持ち鳥渡る  
もの言はぬ残暑の海の深さかな  
本閉ちて虫の音近くなりにつけり  
いなびかり古事記の神は争へり

横浜 大内由紀

港町おほふがごとく雲の峰  
山間を渡る月光寝台車  
停車場のお国訛りや赤とんぼ  
海峡の大橋渡りいわし雲  
日を揺らす湖面の波や初尾花  
露天湯や星降る四方の虫時雨





横浜 柚木 澄

新聞を取りにポストへ明易し

**雲海の上の遠富士秋立てり**

散り敷きて咲き継ぐ朝の花木槿

裏山に避難の記憶敗戦忌

町内の見廻り務む星月夜

朝戸繰り爽やかな風浴びにけり

横浜 辻井ミナミ

厨窓よりふるさとの青田風

風立ちぬつば傾くる夏帽子

没日さす川面にきらと鯉飛べり

ふるさとや縁より上がる盆の僧

天の川孤を描く湾の砂真白

**深煎りのコーヒーを挽く今朝の秋**

横浜 鍋島武彦

**もたらすは慈雨が災禍かはたた神**

敗戦忌語らぬ兄の卒寿かな

一杯の寝酒欠かさぬ生身魂

水かけて深川祭いよ燃ゆ

盆唄やいつか手拍子足拍子

江東の橋渡り継ぎ震災忌

千葉 岡井マスキ

**夏蓬薙ぎて河畔の深轍**

千枚田模様なしたる早稲晩稲

安房の海鱈釣る人の渚べり

秋濤の寄せて真砂女の句碑小さき

月青し真砂女の海へ抜くる道

礁打つ真砂女が海や秋夕焼

横須賀 大川暉美

**ひと声を網戸に落し夜の蝉**

外出終へ日差しをたたむ秋日傘

捨てきれず出しては仕舞ふ秋袷

町抜けて風渡り来る稲の道

寄る波に尾を引く秋の夕日影

かなかなの家路遥かや夕餉時

横浜 谷貝美世

魚影速し残暑の川の通り雨

ひまはりの皆横向ける迷路かな

**白足袋の足踏み高し大神輿**

青空に消えゆく雲や尾瀬の秋

借景の白馬連山花すすき

夜の秋いくたび過ぐる救急車

# 耕 土 集

松本三千夫選

判で押すくらし変らざる生身魂

丘一つ越えたる彼方遠花火

空砲の天つく響き秋祭

湯上りを抜けゆく風の秋涼し

かの峠越ゆれば甲斐や赤とんぼ

横浜 坂口 郁子

走り根の近道選ふ夏の果

とんぼつや寺の筆塚新しき

落蟬に触るればじと飛び立てり

盆波をしぶきにテトラポッドかな

獺怒わか晩年を豊かにす

榊山 智恵



払暁の蟬の背を割る気配かな

神域の沼仄暗し根無草

曲家の十間掻く馬やちろる虫

眼底に軋み覚ゆる残暑かな

稲妻や溶石鎮もれる浅間山

鈴木 鞠子

屋根の栗鼠鎌倉山の涼新た

雁渡し潮騒響く忘帰洞

煎餅を買ふや押し寄す鹿の群れ

空澄むや注連縄高き那智の滝

朝日射す畑を彩り螢草

宮元 陽子

野仏に蔭差しかけぬ草の花

法師蟬夕日の余韻広げをり

静かなる池塘の浮葉蜻蛉打つ

牧の朝鼻紋を濡らす露律

天碧き葛折ゆく大花野

伊藤 平八

棚経の僧に問はれて道案内

馬追や宵の玻璃戸に影写し

捨て種の未成り南瓜垣の外

野仏の丈に添ひ咲く曼珠沙華

秋すだれ捲いて見あぐる宵の空

加瀬 伸子